KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART

神田日勝記念美術館だより

「家」 1960年

contents

2 第14回蕪墾祭
第16回馬耕忌
第6回日勝祭

3 「新世紀の顔・貌・KAO30人の自画像2008展Ⅱ」
「水への誘い」
「風景の会」展
「北海道現代具象展」
「細密画の世界」

4 開館15周年記念企画展に寄せて
「神田日勝の作品を語る」
「室内風景」小檜山博
「飯場の風景」徳丸滋
「人と牛C]齊藤隆博

5 開館15周年記念企画展に寄せて
「神田日勝の作品を語る」
「人と牛C」齊藤隆博
「牛」岡部卓
「馬(絶筆)」斎藤吾朗

6 平成20年度特別企画展
「神田日勝の細密表現を巡って」
関連事業～親子ワークショップ

7 平成20年度常設展～神田日勝の描いたモチーフから～
「神田日勝の牛を巡って」
「神田日勝の描いた静物」
「神田日勝が描いた十勝の自然」

8 開館15周年記念企画展「神田日勝の世界」
開館15周年記念事業
「馬」感想文コンクールを実施・「町民絵画展」

9 第14回馬の絵作品展
表彰式
馬の絵写生会
鹿追高校、ボランティア同好会も協力

10 神田日勝記念美術館の歩み
～平成15年から平成19年まで～

11 感想ノートより…23
入館者数45万人突破
雑誌「éclat(エクラ)」で神田日勝記念美術館紹介
キッズ・ボランティア、楽しく充実
アート・キッズ・クラブ2008

12 夏休み子どもワークショップ
冬休み子どもワークショップ
春休み子どもワークショップ
芸術鑑賞バスツアー
子ども芸術鑑賞ツアー
町内小中学校の神田日勝についての授業の
取り組みから

2009.3.31
26

KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART
神田日勝記念美術館
〒081-0292
北海道河東郡鹿追町東町3丁目2
TEL(0156)66-1555
http://kandanissho.com/

開館十五周年を彩る記念の日

第十四回蕪墾祭（開館記念祭）

六月十七日
神田日勝記念美術館・鹿追町民ホール

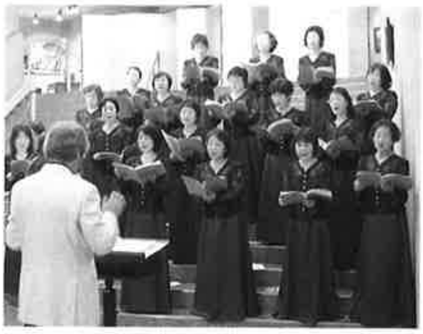
鹿追の「そよ風コーラス」と帯広と音更を中心に活動する「クールビヨン」による童謡や唱歌によるコンサートが美術館の展示室を会場に行われました。

「そよ風コーラス」は中田喜直の童謡曲集から「もりのよあけ」や「お月さんと坊や」などを、「クールビヨン」は「さくら　さくら」や「黒田節」、「春よ来い」など懐かしい曲の数々を披露、町内外からの来場者一五〇人余が、聴き入っていました。

この後、町民ホールを会場に交流会が開催され、ワインとチーズのほか、実行委員の手作りによる山菜料理などを楽しんでいました。

最後に、「クールビヨン」によるアンコール演奏も行われ、会場は温かな雰囲気に包まれました。

交流会会場


クールビヨンによるコンサート

第十六回馬耕忌

八月二十四日・鹿追町民ホール

左から吉田氏、齊藤隆博氏、斎藤研氏、奥岡氏

本年は開館十五周年を記念して、芸術の森美術館長・奥岡茂雄氏、独立美術協会員・齋藤研氏、全道美術協会員・齊藤隆博氏、美術評論家・吉田豪介氏の四氏を招き「神田日勝」と『室内風景』を語るアートディスカッションが行われました。

奥岡氏は、北海道立近代美術館の準備室時代に神田日勝の『室内風景』を購入し、『死馬』『人と牛D』の寄贈を受け思い入れが深いこと、「ライフ」が日勝芸術にとって大事であると述べ、齋藤研氏は、日勝と同世代で独立展にも同時期に出品、日勝作品を独立展の記念展で展示したいと述べ、齊藤隆博氏は、教員として十勝に赴任し日勝と同時代に独立展に出品した想い出と、当時の十勝の画家たちに大きな影響を与えていたことなどを述べ、吉田氏は今までに三回日勝論を書いたが、満足できないこと、岡本太郎氏が日勝作品に魅入っていたこと、『室内風景』にはアンビバレンスな両面価値的なところがあるように思えることなどを述べ、提言ののち、意見を交わしました。

田中光俊氏のギター演奏をはさんで「北海道現代具象展」出品作家が自作への思いなどを語りました。

第六回日勝祭（生誕祭）

十二月八日
鹿追町民ホール・神田日勝記念美術館

神田日勝と同時代を生き、子どもの頃から交流のあった山岸明氏、鈴木孝一氏、脇坂裕氏の三人を招き、武田耕次氏の司会で神田日勝の思い出やエピソードなどを語っていただきました。

山岸氏は日勝と中学生時代の同級で、「日勝は相撲が好きで強かった。休み時間に友だちに頼まれ絵を描いていた。」また鈴木氏は日勝の一級先輩で、「複式だったので同じクラスだった。青年の頃は、青年団の活動で『山麓の人々』という演劇に日勝とともに参加し、脚本賞をいただいた思い出がある。」また同じく一級先輩の脇坂氏は、「日勝さんは（石原）慎太郎刈りがよく似合い、また馬の品評会で賞をとったはずです」などと語ってくれました。

座談会のあと会場を美術館ロビーに移し、「細密画の世界」展のオープニングを兼ねた交流会が催され、参加者などと親睦を深めました。

左から鈴木氏、山岸氏、脇坂氏、武田氏

「新世紀の顔・貌・KAO 三十人の自画像二〇〇八展Ⅱ」

四月二十九日〜五月十一日
神田日勝記念美術館

美術評論家・中野中氏企画による画家の自画像展で、東京を中心に毎年全国数カ所を巡回、鹿追では四回目の開催となります。

道内出品の、髙橋正敏氏を始め三十人の作家の自画像が並びました。技法は油彩、アクリル、水彩、ミクストメディア、岩絵の具など伝統的なものから現代的なものまで多種多彩。

中野氏の「いかに孤独（孤立ではない）であろうとも、個と対峙するところからしか作品は生まれない」（著述より一部抜粋）と述べており、各作家たちの個性豊かな作品に来場者は、一つ一つていねいに鑑賞していました。

第三回十勝管内水彩作家展「水への誘い」

六月十六日〜二十二日
鹿追町民ホール

帯広や音更、芽室などで活躍する水彩作家二十二名による作品が並びました。

木漏れ日の漏れる遊歩道、晩秋の放牧地など十勝の四季折々の風景、バレエのポーズをとる少女、バラの花など色鮮やかな作品群に来場者は魅入っていました。

また、オープニングでは、水彩連盟の川村良紀会長による合評会も行われました。

第二十三回「風景の会」絵画展

八月九日〜十七日・鹿追町民ホール

中日新聞社が中心となり東海地方で組織されている「風景の会」の展覧会。東海北陸自動車道全線開通を記念したテーマで、三十名の画家による飛騨高山や郡上市、白川郷などの風景が並び、その土地ならではの民家や自然の風景に来場者はじっくり鑑賞していました。

「北海道現代具象展」

八月十九日〜二十四日・鹿追町民ホール

道内の具象系の作家二十一名が実行委員会を組織し、道外から五名の招待作家を加え、三十三点を展示する「第二回北海道現代具象展」。

笠井誠一、野田弘志、蔡國華、醍醐芳晴、畑中優の五氏が招待作家でいずれも注目度が高く、実行委員会のメンバーも道内外で活躍する中堅からベテランまで、油彩・水彩・日本画・版画など多彩な技法による人物・風景・心象表現など、具象絵画の可能性をうかがわせる迫力ある作品が並び、来場者は、作品をくいいるように鑑賞していました。

「細密画の世界」展

十二月九日〜二十三日
神田日勝記念美術館

篠田教夫、松村繁、瀬戸照の三名の画家による細密画二十七点が展示され、その精緻で微細な表現世界に長時間魅入る来場者もいました。

篠田氏は、鉛筆による緻密な描写で、樹木や神社・仏閣などを描き、松村氏はシェイプドキャンバスに人物や神話の半獣神などをファンタジックに描き、瀬戸氏は、石や花、干し柿などを細部に至るまで描き込み、いずれも細密表現に特徴のある作家たちです。

十二月八日の日勝祭に併せたオープニングには三名の作家も出席、参加者と交流を深めました。

「雲」松村　繁

「石」瀬戸　照

「闇の華」篠田　教夫

開館十五周年記念企画展に寄せて

「神田日勝の作品を語る」

開館十五周年記念企画展「神田日勝の世界」に寄せて神田日勝の作品について、ゆかりのある五氏がそれぞれ思いのある一点について語った文章を紹介します。

（協力・北海道新聞社）

＊小檜山　博＊

「室内風景」1970年

たぶんぼくは、ここ三十八年間に、この絵を何種類かの画集を含めて百回は見てきた気がする。そしてそのたびに、ひどく重苦しい気分のなかで、この絵に描かれている男は俺（おれ）だと思ったのだった。思っては打ちのめされた。

つまりこの絵を見ていると、ぼくの中に隠れている汚濁が表面に露出してきて、いつも必死に隠している他人をねたむ気持ち、嫉妬や恨み、憎悪がむき出しになってくる気がするのだ。それはつらい。

ふだんぼくの意識の底に沈んでいる厭世や自由、悲嘆、悲哀や屈辱、名声や地位、カネがほしいという欲望が引きずり出され、ぼくの心が白日のもとにぶちまけた汚物みたいになるのを感ずるのだ。同時にこの絵が人間の未来、運命の普遍をえぐり出しているゆえに、神田日勝自身の自画像になっているのも感ずるのだ。

パリのオルセー美術館でゴッホの四枚の自画像を見たとき、スペインのソフィア王妃美術センターでダリの少年炭鉱夫の自画像を見たときと同質の感懐を、ぼくは「室内風景」の中の男を見るたびに感じる。

＊小檜山　博＊　（こひやま・はく）

網走管内滝上町生まれ。
76年、小説「出刃（でば）」で北方文芸賞受賞。
83年に「或る女」で泉鏡花賞、北海道新聞文学賞を受賞。
2005年、北海道功労賞。北海道文学館副理事長。
北海道文化財団理事なども務める。
札幌市在住。71歳。

当然のことルーブルで見た「モナ・リザ」の女性像もレオナルド・ダ・ビンチ自身の自画像に思えたし、オルセーにある「晩鐘」の中の祈る農夫も作者のミレーの自画像に、ぼくには見えたのだ。特別目新しい感覚ではない。

ぼくもまた、これまで自分が書いてきた百五十編の小説と三千編のエッセイすべてがぼくの自画像だと思っているからだ。けっきょくものを創（つく）るということは、己（おのれ）の自画像を描くことの枠から抜け出すことはできないのではあるまいか。恐ろしいことだ。

日勝の「室内風景」の前に立つすべての人が、己自身に出会うだろう。

（神田日勝記念美術館長）

＊徳丸　滋＊

「飯場の風景」1964年

この絵をはじめて見たのはもう四十年以上前のことである。飯場でルンペンストーブを囲み屈強の男が休息する風景で、その存在感に心を動かされたことはいまでもはっきり覚えている。それより数年前、糠平でダム工事の飯場を訪れたときのことを思い出した。ちょうど昼食時で、休息する男たちはそれぞれ自分の形で休息していた。

ストーブを囲む男たちの数は多かったが、絵と同じようにそれぞれが寡黙で静かに休んでいた。その部屋とこの画面を覆っている雰囲気が同じなのである。フィクションだろうと思うが、なんと臨場感のある絵だろうと感動した。

神田日勝の写真に腕組みするスナップが何枚か残っている。この画面の中でも腕組みする男が何か思索するような表情で、まるで哲学者のようにひとりは座り、ひとりはヨコになっている。

彫刻家がのみで像を刻むように、日勝はペインティングナイフで絵の具を板に刻み続けた。それは、孤独で何か思索しながら黙々として、土を耕す労働と同じ作業なのである。その作業を何日も繰り返しているうちに、自分の世界観がはぐくまれ、それが画面に満ちている。

子供のころ、川辺で泥遊びをした。泥を手の中で握ると、指の間から泥がにゅっと出てくる感覚がよみがえる。それと絵の具を練るときの感触が非常に似ている。筆で描くよりペインティングナイフで描くときのほうが泥遊びの快感に似ているのである。そして、その心地よさが、絵を描き続けることの重要な要素になっていたことだろう。

ストーブを中心に人物やものが円形に配置されていることも、ぼくの目に固定されることなく、長い年月がたっても新鮮な印象を与えてくれる。色数が少ないのも古い写真を連想して郷愁を感じる。

ベニヤ板に刻み込まれたタッチの跡は神田日勝の思索の跡である。

（画家）

＊徳丸　滋＊　（とくまる・しげる）

帯広市生まれ。帯広柏葉高校卒業。
1977年、第一回北海道現代美術展、83年、北方のイメージ「北海道の美術83」（ともに道立近代美術館）などに出品。神田日勝とは、全道展出品を通じ、亡くなる数年前から手紙などで親交があった。
後志管内倶知安町在住。73歳。

＊齊藤　隆博＊

今、神田日勝記念美術館では情報化社会の中で「どう生きるか」を問う代表作「室内風景」と絶筆「馬」が寄り添う特別展「神田日勝の世界」が開かれている。

「人と牛C」1968年

「室内風景」は開館十五周年記念として道立近代美術館から久しぶりに戻ってきた。張り巡らせた新聞紙の中で日勝が人生観を静かに見つめ直す機会を与えてくれる企画展である。是非「室内風景」の「あの男」に再会してもらいたい。記念美術館は日

本美術界全体で注目される作家を招聘（しょうへい）するなど、いまや帯広だけでなく、全道、全国への芸術文化の発信地として貴重な役割を果たしている。

さて、この「人と牛C」はようやく冷害の傷が癒え秋の豊穣（ほうじょう）の喜び、生きる確かさ、家族愛へとテーマが進展するきっかけとなった一つであろう。

陽光を浴び、強烈な色彩がうねる画面はまるで生活の満足度、自由さを慈しむようである。思わず「これも日勝か？」と疑いたくなるほど、今までの思いや絵の様式を見事に断ち切っている。前面には生活のすべてとしての牛が描かれているが、時には馬や困難さを象徴するように板塀が立つ作品もある。牛の存在は重く、理想と現実のはざまで揺れる日勝の生きざまを露呈して興味深い。生活感無しには絵を描けないと語りかけてくるようである。

人は「自由」にあこがれを持つが、意外と真実は不自由な生活の中に隠されている。彼はあらゆる周囲の「壁」を乗り越えようとしていたに違いない。このように作家は内なるドラマを持ち、常に挑戦的でありたいものである。

ところで「長い間、単調な絵ばかり描いていたら強烈な色への欲望が抑え切れなくなった」として日勝は人と牛、画室シリーズなど色彩を多様化した作品群へと進むが、熱に侵されたように数ヶ月でこの牛シリーズを描き終わる。他界する一年前である。制作の行方を模索していたのかもしれない。

（画家、全道展会員）

＊齊藤　隆博＊　（さいとう・たかひろ）

砂川市生まれ。
新得の小学校で教師生活をスタート。
独立展公募で神田日勝とともに同時入選し、東京都美術館で展示された。
大樹中や池田中などで校長を務め退職。現在、芽室高校講師や北海道造形教育連盟顧問。
平原社会員。帯広市在住。65歳。

＊岡部　卓＊

十一年前の一九九七年（平成九年）。日本海側の港町・後志管内岩内町に赴任した私にとって、最初の仕事が「木田金次郎と神田日勝」展であった。

鹿追町の神田日勝記念美術館と岩内町の木田金次郎美術館。ともに若い一歳違いの両館が、十月から十二月半ばまで所蔵作品を互いに交換しての同時開催展で、それぞれの展示室の半分を交換作品のスペースに充てた。

木田についてもほとんど無知だった私。ましてや神田日勝とは。そんな中、岩内にやって来た作品のひとつに「牛」（道立近代美術館所蔵作品の実験作）があった。

ベニヤ板をつなぎ合わせた大きな画面に、全体を覆うような細密な描写。何よりも、手足を鎖で縛られ、腹を割かれて横たわる牛を描くという、日勝の姿勢に衝撃を受けた。岩内周辺の自然と向き合ってきた木田と対比しても、その姿勢の違いに、北海道で生まれた美術の懐の広さを感じたのだった。

当時、「牛」から私が感じ取ったのは、モティーフから伝わる温度であった。牛は死んで腹を裂かれているのに、裂かれた内部の赤に牛の体温の温かさ。それに対して、手前に置かれたホーローのバケツの冷たさ。単に暖色と寒色というだけでは説明できない温度差が作品の中にあった。

さらには石の壁と床によって遮られた奥行き。漁師の仕事を経て画家となった木田が、風景を十分な奥行きを持って眺め、描いたのとは対照的だと感じたものだった。

あれから十一年。北海道の西と東で、個人美術館の活動が積み重ねられている。作家の作品制作の地で、誰もがいつでも鑑賞できる意義は大きい。振り返れば、私はあの時、日勝の作品を十分に見ていなかった。特に画面の質感についてなど、あらためて木田と比較してみるとどう感じるのだろうか。図版を眺めているだけではわからない、ベニヤの上の牛の毛並み、床の石肌、バケツの表面の質感を、作品と対面してじっくりと眺めてみたい。これは鹿追町に行かなければできないことである。

（木田金次郎美術館学芸員）

「牛」1966年

＊岡部　卓＊　（おかべ・たく）

札幌市生まれ。
1996年、岩手大学大学院人文社会科学研究科修了（地域文化専攻）。97年より現職。
後志管内岩内町在住。

＊斎藤　吾朗＊

神田日勝さんの絶筆「馬」をこのまま描き進めたら、後ろの方が欠けてしまいそうだ。多くの絵描きは全体の構図を決めてから細部を描き込むので、こうした姿の馬の絵は見たことがない。その上、前脚だけで馬は見事に立って生きている。後ろの方がなくても少しも気にならないし、この絵をそのままパッケージに印刷した菓子も販売されて好調だ。（「死馬」や「瘦馬」が使われていたら、あまり売れないだろう）。

未完成とキャプションにあるが、見れば見るほどこの作品はこれで完成しているのだと思えてくる。弥次郎兵衛のような二本脚、ベニヤ板とのバランス、人生半ばで急逝してしまうことをわかりきったかのような半身の馬、夭折（ようせつ）も未完成も不幸な偶然だったが、日勝さんの絵画力が必然性を産み出したのである。

日勝さんと同じように独立展にあこがれ、私も挑戦し続けたが、第三十八回展（一九七〇年）も落選だった。悔しさを胸に東京都美術館の独立展を食い入るように見て回った。最後の方の部屋に「室内風景」が飾られていた。かなりの時間、その絵の前に立っていた。後になって、その作者は馬の絵を残して亡くなっていることを知った。

東京都練馬区に生まれ、馬の大地に入植し、酪農学校に学び、馬を育て、数多くの馬を描き、二本脚の馬を残して神田日勝さんは短い人生を終えた。とても残念なことだが、独立美術協会の創立会員でさえ公立美術館はほとんどできていないのが現状である。日勝さんの分身とも言うべき絶筆の馬をシンボルマークにした神田日勝記念美術館の作品群は今も高らかに生を謳（うた）いあげている。前脚だけでまだまだ前進し続ける日勝さんを私たち独立展の後進はひたすら追い続けている。個展やグループ展などで美術館に伺う機会が増え、日勝さんとの糸が会う絵のご縁に心より感謝している。

（画家、独立美術協会会員）

「馬（絶筆）」1970年

＊斎藤　吾朗＊　（さいとう・ごろう）

愛知県西尾市生まれ。
1982年、独立展で第50回記念賞受賞。
86年、米ハーバード大学芸術学部特別講師。
88年、愛知県芸術選奨文化賞受賞。
西尾市在住。60歳。

＊２００８年８月４日から８日まで北海道新聞夕刊に連載された特集を再録しました。

平成二十年度特別企画展

「神田日勝の細密表現を巡って」

十一月五日～十二月七日　神田日勝記念美術館

毛先の一本一本、板目の模様、新聞の見出しや広告など、細部までこだわって描いた神田日勝。その細密表現に焦点をあてた特別企画展。

今回の展覧会で油彩では松樹路人、伊藤光悦、矢元政行、森弘志、山口健智、版画では伊藤倭子、佐藤克教、水彩では佐藤進の作品を展示し、個々の作家の特徴や個性などと対比して、神田日勝作品の細密表現について特徴や意味などを探ろうとするものです。

「壁と顔」1968年

「ヘイと人」1969年

細密表現を美術史上から俯瞰（ふかん）すると、まず思い浮かぶのは、デューラーの自画像やブリューゲルの風景画でしょうか。デューラーは素描や銅版画にも異才を発揮しています。一方、日本では大正期に洋画の岸田劉生や三岸好太郎、日本画の速水御舟や土田麦僊らの作品に細密表現による描写が見られます。いっぽう、現代では、神田日勝記念美術館で開催した「細密画の世界」に出品された鉛筆画など、新たな細密表現の可能性が拡がりつつあるようです。

今回の出品作から、松樹路人の「五月のアトリエから―モデルと魚」は、白いタイルの壁の前に赤い帽子を被った裸婦が座り、背後に魚や皿、パイプなどが端正な筆致で描かれ、透明感と静謐な雰囲気が漂います。伊藤光悦の「Airport」は、手前に大きくカーブを描く飛行場の誘導路と上方に位置する地平線が航空機が着陸する直前の臨場感を与え、その緻密な描写がパノラマのようです。森弘志の「霧の音」は三人の裸婦がばらばらに存在し、椅子やテーブルなどの小物が寓意的に配置され、まるでドラマか映画の一場面のような感じさえします。山口健智の「静物―切れた電球」は、マッチ箱や鉛筆、電球などの質感がリアルに表現され、伊藤倭子の「あおい梅」は、銅版による微細な表現で果物や壁紙のマチエールを表しています。

松樹路人
「五月のアトリエから―モデルと魚」
1983年

伊藤光悦「Airport」1999年

森弘志「霧の音」1992年

矢元政行の「奇想空間」では巨大な飛行船が潜水艦のようなものに林立する煙突や無数のパイプやそこで群れ遊ぶ人々を描き、ボッシュに通じるような不気味さを思わせ、佐藤克教の「囚われて」は木版によるモノクロの中に力強い有機体のようなフォルムを緻密な表現で描き、強い存在感を感じさせ、佐藤進の「南瓜」は床にころがる南瓜をていねいに観察し、透明水彩で写実的に描いています。

神田日勝の初期の作品「家」や「ゴミ箱」では、焦げ茶色を基調に、板壁やバケツ、ドラム缶などをペインティングナイフで丹念に描き、金属やガラス、土、木片などの質感が絵の具の濃淡やタッチから伝わってきます。この描き方は「飯場の風景」や「馬」では、人間の手足や頭、馬の体毛などの表現に技法の深化がうかがえ、馬体に確かに体温があり血が通っているような感覚さえ与えるようです。日勝は「牛」で腹を裂いて真っ赤な内臓を描き、この作品の後、「静物」や「画室」のシリーズを描くなど、色彩が鮮やかになっていきましたが、細部へのこだわりは強く、毛並み、石畳、バケツやダンボールなど、モノの質感を意識し、一つ一つの存在感を際だたせました。

一九六八年から七〇年にかけて、厚塗りの作品群と克明描写による作品がほぼ同じ時期に制作されますが、次第にポップアートに触発されたものや社会的なテーマも顕在化してゆきます。

晩年の「馬（絶筆）」や「静物・家（未完）」など未完成の作品からその創作過程がわかりますが、日勝の細密表現は、まず部分へのこだわりがあり、新聞の文字、馬の毛並みなどの細部を丹念に描く一方、その造形思考も、部分から全体へ、画面全体を見渡して描くのではなく、絵の一部を仕上げながら、描き進めてゆくというもので、それが画面から伝わる息遣いや手触り、ぬくもりや実在感となっているのではないでしょうか。

山口健智
「静物―切れた電球」1965年頃

伊藤倭子「あおい梅」1975年

関連事業

親子ワークショップ

「ジグソーパズルを作ろう！」

十一月二十三日　鹿追町民ホール

約9㎝角の木のジグソーパズルにアクリル絵の具で色を塗る企画に、幼児と小学生十名が参加しました。

まず、特別企画展で神田日勝や細密表現に特徴のある作家の作品を鑑賞。工作室での製作では、しなベニヤ板に絵の具を塗る際に木目や切り口に引っかかったり、かすれたりするため、神田日勝がベニヤ板に描いたことを思い浮かべながら、花と虫、怪獣、風景など、図柄を工夫して、楽しく取り組みました。

平成二十年度常設展
～神田日勝の描いたモチーフから～

「神田日勝の牛を巡って」（前期常設展）
四月二十九日～七月六日

「牛」1964年

「人と牛C」1968年

神田日勝は、牛を主題にした作品を六点描いていますが、そのうち二点は克明描写による横たわり死んだ牛です。

一九六四年と六六年にほぼ同じ構図で描かれ、特徴的なのは、いずれも腹が切り裂かれ赤い内臓を描いていることです。この構図は画面いっぱいにくの字に折り曲げられた身体、鎖に繋がれた手足、そして冷たい石畳などが六五年の「死馬」とも共通しています。

一方、「人と牛」は、AからDまで四点あり、いずれも厚塗りの流動的な筆致で、赤や黄色、青や緑などの原色で、牛の背後には人々、あるいは家族のようにも見えますが、手を挙げ、生きる喜びや生命の賛歌を表しているようです。

牛では、生と死という対極的な主題で、命の尊厳や儚さ、そして大地とともに生きる喜びや誇りのようなものを感じさせます。

なお素描には、搾乳をする人や牛の周りを取り囲む人々など、人と牛の関わりを暗示させるものもあります。

「神田日勝の描いた静物」（中期常設展）
八月二十六日～十一月三日

「静物」1966年

「静物」1968年

神田日勝が描く静物は、花や人形、置物などのたぐいではなく、生活に必要なもの、日常に見慣れたもの、あるいは捨てられたものなど、ふだんは見過ごされ、描く対象とはならなかったものが多いようです。

「静物」（一九六六）は、筵（むしろ）の上に果物や野菜、肉や魚が山積みにされ、ダンボールやバケツ、長靴などもあり、生活の気配が感じられます。また「静物」（六八）では、高橋由一の「鮭」を彷彿（ほうふつ）させ、目を引きます。

「家」（六〇）や、「ゴミ箱」（六一）では、廃品が無造作にころがり、うち捨てられたものの存在感が際だっています。

「静物・家（未完）」（七〇）では、魚の骨とりんごの皮、そして家の形がシルエットのようですが、周囲には何も描かれておらず、日勝が部分を仕上げながら、全体へと描き進めていたことがわかり、「馬（絶筆）」と「室内風景」（七〇）の同時期にあたります。

また、日勝は、小品として果物などをモチーフに静物を数多く描きました。これらは、画廊などでの展示や知人に依頼されて描いたものといわれています。

「神田日勝が描いた十勝の自然」（後期常設展）
十一月九日～四月二十六日

「風景」1956年頃

「荒野の廃家」1965年頃

神田日勝が描いた「風景」（一九五六頃）は、当時の自宅周辺の牧柵や柏の小さな林、そして積み上げられた馬草が描かれ、当時の生活がうかがえます。

また、「荒野の廃家」（六五頃）や「離農」（六九頃）は、荒れ果てた耕地、空き家となった家、全体を覆う陰鬱な空気感など、六〇年代の冷害や離農が相次いだ時代を反映しているようです。

日勝が描いた十勝の自然は決して特定の場所を写生したものではありませんが、どこかに実際にありそうな風景でもあり、そのような既視感が懐かしさや郷愁を誘うようです。

四季の移り変わりの中で、春や夏の風景は少なく、最も多いのは刈り取りを終えた晩秋の風景です。画面の上方に地平線を配し、前方に拡がる耕地。ポプラ並木や小川、放牧された馬をシルエットでとらえたものもあり、十勝のどこまでも拡がる大地を思わせます。冬の風景では、サイロのある農場を低い位置から見上げたような構図の作品を数点描いており、馬そりや野ウサギらしき足跡もあります。

六八年には帯広信用金庫にカレンダーの原画を依頼され、「扇ケ原展望」や「広尾海岸」を描きました。

日勝が描いた自然は、生涯の大半を過ごした十勝の風土に根ざしたもので、その空気、風、土の匂いを感じさせるようです。

開館十五周年記念企画展

「神田日勝の世界」

七月八日～八月二十四日
神田日勝記念美術館

開館十五周年を記念して、「神田日勝の世界」展を開催。日勝が作品を主に発表していた全道展と独立展出品作を中心に構成、日勝の画業の変遷をたどり、小川敬信氏のコレクションによる日勝の十勝の風景画も併せて展示しました。

「室内風景」1970年

「馬」1957年

「板・足・頭」1963年

神田日勝は一九五六年、帯広の平原社展に「痩馬」を初出品、朝日奨励賞を受賞。翌年同展にて「馬」が平原社賞を受賞しました。

全道展には六〇年に「家」を初出品、六六年に「静物」で会友賞、会員になりました。

また、独立展には六四年に「一人」を出品、初入選を果たし、その後連続入選、七〇年には、「室内風景」が日勝の没後、遺作として展示されました。

「画室E」1967年

「雪の農場」1970年

「黄昏の農場」1969年

「人と牛D」1968年

独立展のほかに独立選抜展があり、これは東京都美術館が独立美術協会に要請し、気鋭の作家を選び一九六一年から第十四回展まで継続、日勝も六五年の「飯場の風景」から六九年の「壁と顔」まで　連続出品しています。

この独立選抜展評は『独立クロニクル』に掲載されており、選抜展の出品者の追想が掲載された『クロニクル』の複製パネルを資料として紹介。

また、日勝の絵に対する情熱と作品に魅了された芽室町在住の小川敬信氏の小川コレクションから「黄昏の農場」や「雪の農場」など十勝の晩秋から冬にかけての風景画九点を展示しました。併せて同氏より寄贈された『若者の素顔』のための背景画」も展示しました。

開館15周年記念事業

「馬」感想文コンクールを実施

「馬」1965年

表彰式（一般の部）

開館十五周年記念事業として、神田日勝の代表作「馬」の印象や感想を「感想文」として募集し、二九点が寄せられました。

表彰式は「馬の絵作品展」と併せ十月十一日に実施されました。なお入選作品集も発行しました。

「馬」感想文入賞者

小学生の部

最優秀賞	市瀬　愛梨	森町立鷲ノ木小学校6年
優秀賞	加藤　琳望	森町立鷲ノ木小学校6年
入選	廣川　花音	上川町立層雲峡小学校1年
	久保　光彰	八戸市立青潮小学校1年
	佐々木歩乃華	森町立駒ヶ岳小学校4年
	立花はなを	広尾町立豊似小学校5年
	村山　大河	鹿追町立笹川小学校4年

中学生の部

最優秀賞	瀬澤　晃生	札幌市立平岡緑中学校3年
優秀賞	北名　純也	札幌市立厚別北中学校2年
	菖蒲　悠	和寒町立和寒中学校2年
入選	清水　愛里	鹿追町立瓜幕別中学校3年
	高橋　桃子	鹿追町立瓜幕別中学校3年
	谷口　希美	北杜市立高根中学校1年
	小林　知弘	池田町立池田中学校2年
	山田　潤	鹿追町立鹿追中学校1年

一般の部

最優秀賞	風間千鶴子	旭川市
優秀賞	葛西　康三	石狩市
	北元　聖子	浦幌町
入選	中島　玲子	札幌市
	楓　アヤ	札幌市
	中村留美子	札幌市
	松本　圭二	上士幌町
	宮田　智	札幌市
	小山　美穂	小樽市

「町民絵画展」

十二月五日～十日
ポロ（連絡通路）

町内在住または在住経験者の油彩・日本画・水彩など二十三名の作品が鹿追町民ホールと神田日勝記念美術館を結ぶポロに展示され、通路を利用する町民が立ち止まって魅入っていました。神田日勝の愛娘の「一枚の繪日曜画家コンクール」受賞作品も展示され、話題になりました。

第14回 馬の絵作品展

10月7日〜14日 鹿追町民ホール

■文部科学大臣賞
羽幌町立羽幌中学校3年 梅原　豊史君

今年は、応募総数一一三七点。道内では渡島、後志、釧路管内、道外では茨城県と滋賀県が増え、スペイン在住の中学生からも応募がありました。

■北海道知事賞
浦河町立浦河第二中学校2年 阿部　一真君

■北海道教育委員会教育長賞
鹿追町立鹿追小学校4年 東原　由佳さん

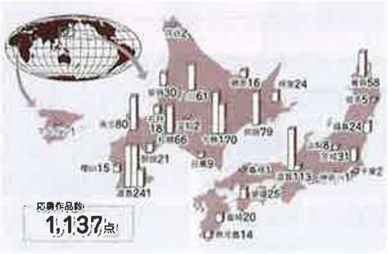
学年別では小学校三年と六年が昨年より増えています。

文部科学大臣賞の羽幌中学校三年の梅原豊史さんの作品は、馬の顔を正面からしっかりととらえ、デッサン力もあり、細部まで端正に描かれた力作です。この他にも、大胆な構図のもの、馬の躍動感を感じさせるもの、そして馬同士や人間との温かい触れ合いを描いたものなど、多くの力作が寄せられ、入賞十三点、入選三十二点、佳作四十五点が選出されました。

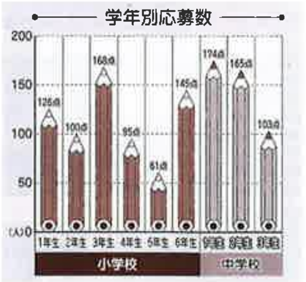
小樽市の市立小樽美術館市民ギャラリーと深川市のアートホール東洲館に入賞・入選などの作品が巡回し、反響を呼びました。

第14回馬の絵作品展入賞者

- ○文部科学大臣賞
  羽幌町立羽幌中学校3年 ── 梅原豊史
- ○北海道知事賞
  浦河町立浦河第二中学校2年 ── 阿部一真
- ○北海道教育委員会教育長賞
  鹿追町立鹿追小学校4年 ── 東原由佳
- ○鹿追町長賞
  鹿追町立鹿追小学校5年 ── 松井大和
- ○鹿追町教育委員会教育長賞
  釧路町立遠矢中学校3年 ── 福井香寿弥
- ○神田日勝記念美術館長賞
  函館市立湯川小学校1年 ── 青山優愛
- ○北海道新聞社賞
  豊頃町立豊頃中学校1年 ── 千葉俊之
- ○十勝造形サークル委員長賞
  北海道教育大学附属旭川小学校3年 ── 平澤佳子
- ○帯広市教育研究会図工美術部会長賞
  函館市立北美原小学校6年 ── 東谷枝里奈
- ○JR北海道社長賞
  今治市立菊間小学校2年(愛媛県) ── 森田奎介
- ○北海道電力帯広支店長賞
  羽幌町立羽幌小学校5年 ── 加賀谷野明
- ○帯広信用金庫理事長賞
  羽幌町立羽幌小学校6年 ── 梅原誉生
- ○ホテル福原社長賞
  北海道教育大学附属釧路中学校1年 ── 齊藤明日香



地域別応募数



学年別応募数

表彰式

十月十一日・鹿追町民ホール

文部科学大臣賞の賞状を授与される梅原豊史君

愛媛県からの入賞者も含め、入賞者十三名のうち八名、入選者十五名の総勢二十三名が参加した表彰式では、齊藤隆博審査委員長の講評のあと、部門別に賞状と記念品が授与されました。

式の後家族との記念撮影をする参加者の姿が見うけられました。

馬の絵写生会

七月三十日 ライディングパーク

馬を見ながら写生

小学生四十一名、中学生一名の計四十二名が参加。体験乗馬のあと、柵の周りで馬の写生を行い、ウリマックホールで色塗りなどの仕上げを行いました。

講師に齊藤隆博・脇坂裕両先生を迎え、児童の間を周り、馬のとらえ方、構図、動物を描くのこつなどを一人一人アドバイス、皆熱心に取り組みました。

馬をなでたり、柵の周りで写生する際に、馬に草を食べさせたりして触れ合いながら、馬の身体の特徴、毛並み、周りの景色など、工夫して一生懸描いていました。

鹿追高校、ボランティアで同好会も協力

紙額を貼る鹿追高校ボランティア同好会の皆さん

鹿追高校ボランティア同好会による馬の絵作品展へのボランティア活動も三年目になりました。

作品展の準備作業である印刷物の発送、出品者の題箋書き、紙額の作成などを五名が協力して取り組み、小中学生の頃応募した生徒もいて、懐かしそうに絵を見ながら作業をしてくれました。

神田日勝記念美術館の歩み

～平成十五年から平成十九年まで～

【平成十五年度】

開館十周年記念展―「ぼくはここにいる」①
開館十周年記念式②
開館十周年記念事業―「飯場の風景」感想文募集
開館十周年記念展―「神田一明の世界－時の深き淵から」③
第九回蕪墾祭
第十一回馬耕忌
神田日勝生誕祭―日勝祭④
第九回馬の絵作品展
神田日勝記念館友の会が鹿追町文化賞受賞
戦没画学生『いのちの詩絵展』／『新世紀の顔・貌・KAO』展
『人を描く展Ⅱ』／石川文洋報道写真展『戦争と民衆』
町民絵画展
アート・キッズ・クラブ／子どもワークショップ（夏⑤・冬・春）
親子写生会／親子ワークショップ
芸術鑑賞バスツアー／子ども芸術鑑賞ツアー
絵画教室―油絵講座／水彩画講座／子ども絵画教室―油絵講座

【平成十六年度】

平成十六年度特別企画展「さえぎられた世界」
「扇ケ原展望」をめぐって（前期常設展）
「十勝の農村風景」（後期常設展）
第十回馬の絵作品展
『新世紀の顔・貌・KAO』展／『世界の戦場から』展・桃井和馬トーク⑥
『超克の標』展⑦
『武蔵野の作家たち～武蔵野から北の大地へ～』
美術講座・作品解説⑧・水彩画公開制作
『"グループ環"油彩展』／『多賀新』展
小室吏氏、日勝の頭像を記念館に寄贈
入館者、四十万人突破（五月二日）
「人と牛A」寄託
第十回蕪墾祭
第十二回馬耕忌⑨
第二回日勝祭
アート・キッズ・クラブ／子どもワークショップ（夏・秋季・冬）
親子ワークショップ
絵画教室・子ども絵画教室／絵画教室―油絵講座
芸術鑑賞バスツアー／子ども芸術鑑賞ツアー

【平成十七年度】

館名が"神田日勝記念美術館"へ
神田日勝記念館友の会に北海道博物館協会表彰
平成十七年度特別企画展「徳丸滋の世界」⑩

「家を描く」（前期常設展）
「小檜山博が語る神田日勝」（後期常設展）
第十一回馬の絵作品展
『新世紀の顔・貌・KAO―三十人の自画像―二〇〇五』⑪
『美の浮標』～多摩美術大学の洋画家たち～／『追想～カトラン～』展
『四季折々に』村上俊彦油彩画展／『美へのいざない』展
坂田明mii　青森・北海道ツアー二〇〇五⑫
第十一回蕪墾祭⑬
第十三回馬耕忌
第三回日勝祭
アート・キッズ・クラブ／子どもワークショップ（冬・春）
親子ワークショップ／水彩画教室
芸術鑑賞バスツアー／子ども芸術鑑賞ツアー

【平成十八年度】

高橋揆一郎前館長、逝去（二〇〇七年一月三十一日）
平成十八年度特別企画展「海と大地と空と」⑭
美術講座
「素描と作品」（前期常設展）
「神田日勝とマスメディア」（後期常設展）
第十二回馬の絵作品展
版画作品による『東山魁夷の世界』／十勝管内水彩作家展『水への誘い』
鉛筆画の世界『私の釈迦十大弟子』原画・『仮面の世界』展
赤絵の世界『斎藤吾朗の軌跡展』⑮
『ACT5展』／『木下晋　絵本原画展』
第十二回蕪墾祭
第十四回馬耕忌
第四回日勝祭⑯
アート・キッズ・クラブ／子どもワークショップ（夏・冬・春）
キッズ・ボランティア活動開始⑰
芸術鑑賞バスツアー／子ども芸術鑑賞ツアー
神田日勝記念美術館のホームページ開設

【平成十九年度】

平成十九年度特別企画展「絵の具だ！バンザイ！」⑱
「神田日勝の色彩～土の色」（前期常設展）
「神田日勝の造形～キュビスムを手がかりに」（後期常設展）
第十三回馬の絵作品展
「十勝管内水彩作家展・水への誘い」／「美の棲む処―ten展」
「北の貌―佐藤雅英写真展」⑲／「信仰」と「芸術」展
「人を描くⅢ」／「野村たかあき絵本原画展」⑳
第十三回蕪墾祭
第十五回馬耕忌
第五回日勝祭
美術講座
アート・キッズ・クラブ／子どもワークショップ（夏・冬・春）
親子ワークショップ㉑
芸術鑑賞バスツアー／子ども芸術鑑賞ツアー

入館者数四十五万人突破

二〇〇八年六月十五日

45万人目となった旭川在住の下川さんご夫妻

一九九三年の開館以来累計の入館者数が、四十五万人を超えました。四十五万人目となったのは、旭川市の元小学校校長の下川鉄夫さん。

家族の中でまだ訪れたことのない人がいたため一家六人で来館し、贈られた記念品を手に、家族から「父の日の良いプレゼントになったね」と祝福されていました。

雑誌「éclat（エクラ）」で神田日勝記念美術館紹介

エクラ6月号の表紙と、紹介頁

女性雑誌「エクラ」六月号で特集された「私の偏愛『個人美術館』」で、女優の真野響子さんが神田日勝記念美術館を紹介しています。道内では北海道立近代美術館と当館の二館が取り上げられています。

真野さんは「彼の絵はその生活と人生観が抽出されている絵。―(中略)―彼の絵には誰もまねできないオリジナリティがあります」などと紹介されています。

感想ノートより―㉓

Thank you Kanda Nissho for your wonderful works of art.
I had an enjoyable time,good feeling in your early paintings.
I enjoyed the vibration of this building on this wonderfully bright and warm day.
（神田日勝さん、すばらしいあなたの芸術作品に感謝します。初期の油彩が気に入り、とても楽しいひとときを過ごさせていただきました。この美術館の建物のすばらしい採光と太陽の温かな日差しがとてもマッチしていて気に入りました。）
2008.5.3 S.

5年前に鑑賞しました。その時忘れられない北海道の思い出になり今回も是非来館したいと昨日月曜日の休館の終わるのを待ち、楽しみに来ました。2回目の鑑賞で更に日勝さんの生き方と絵が好きになりました。またいつか訪ねたいと思います。こんなに強く生きる人がいるのですね。
2008.7.1 新潟（上越）より2名

やっと会えた「室内風景」。引き込まれました。すごい!素晴らしい!私はこう感じました。「あの男」は壁と一体化している…青いりんごやヤカン、あお向けでバンザイしている人形それらが浮き上がり、生活している中での雑貨類、子供のおもちゃなどが主役にみえました。それでも、「あの男」がいるからそれらが存在するっていう感じで、本当に見入ってしまいました。本人の日勝さんの心を聞きたかった…私は絶筆の「馬」が一番好き! 黒曜石のような宇宙に見える黒い目が好き。あの目は完成しているのでしょうか? まだ途中なのでしょうか?宇宙の目も吸い込まれるように光っています。やっと会えた「室内風景」。また数年後に故郷である鹿追に里帰りしてください。
2008.7.11 M

今回の展示が8月24日で終わることを昨日知ってあわてて函館から来ました。やっぱり来てよかった。日勝に会えて、未完の馬に会えてまた生きる勇気、元気、人間の尊厳を教えていただきました。背筋を貫くこの戦慄をどうやって表現すればよいのか。ただただ感動です。日勝、ありがとう。
2008.8.20

キッズ・ボランティア、楽しく充実

キッズ・ボランティアが活躍した
ビー玉パズル製作（6/21）

アート・キッズ・クラブなどの事業を支援するキッズ・ボランティアに鹿追高校ボランティア同好会の生徒六名と一般二名が登録。

小学校低学年の参加が多いため、はさみやカッターを使うときや糊付け、図案のヒントなど一生懸命援助けしてくれ、子ども達もスムーズに作業を進めることができました。

「子どもたちが喜んで作業を進めてくれてよかった」（高校生）、「来年もできる範囲で協力したい」（一般）と語ってくれました。

アート・キッズ・クラブ二〇〇八

五月二十四日～翌年二月二十一日
鹿追町民ホール

マイうちわ作り(7/5)

ペットボトルのフタパズル製作(8/23)

週末活用事業であるアート・キッズ・クラブは、美術館の展示室でのビンゴカードによるクイズを含め、八回のプログラムで実施されました。

厚紙とリベットを活用した動物リベット、ダンボールを小さな角片に切り組み合わせたビー玉パズル、水彩絵の具で好きな絵を描くマイうちわ、ペットボトルのフタを色分けするフタパズル、牛乳パックを活用したしかけ貯金箱、不要となったグラスと和紙で作るプチキャンドル、神田日勝作品の塗り絵という内容です。

二十一名の小学生が登録し、毎回楽しく取り組みました。

キッズ・ボランティア、母親の他、父親も一緒に製作する光景も見受けられるなど、なごやかな雰囲気でした。

児童たちは「中学生になっても参加したい」「動くおもちゃが楽しかった」「キャンドルが面白かった」などと感想を述べていました。

子どもワークショップ

夏休み

ビー玉と紙筒を組み合わせた万華鏡を製作。
万華鏡のしくみが面白いためか、製作途中に何度ものぞいたり、筒の周りに千代紙を貼り、装飾も施しました。
完成した万華鏡は、ビー玉を当てた場所により模様が変わるため、いろいろなものに当てて試していました。

「楽しい万華鏡を作ろう！」
8月7日　参加22名

冬休み

板状に伸ばした粘土を好きな形に型取りしたはしおきを製作。
陶芸工作館職員が粘土の伸ばし方や切り方などの製作のこつの説明のあと、粘土をこね、板で伸ばし、猫や犬などの動物、イニシャル、ハートや星、文字などデザインを工夫しました。成型後、釉薬をかけて本焼きの後、参加者に渡されました。

「楽しいはしおきを作ろう！」
1月8日　参加16名

春休み

色画用紙を切って、糸でつないで吊すモビールを製作。
くじらと魚の型紙を利用したり、タコや星、雨傘や文字など自由に好きなデザインを工夫する人もいました。
はさみで切るのはスムーズに進みましたが、糸を結びつなぐ作業が難しく手間取る人もいました。
皆一生懸命取り組み、完成したモビールを楽しそうに手に持って、家のどこに飾ろうか考える人もいました。

「楽しいモビールを作ろう！」
3月25日　参加16名

芸術鑑賞バスツアー

十月十九日　北海道立近代美術館
北海道立三岸好太郎美術館

参加者は二十名。札幌の北海道立近代美術館の「よみがえる黄金文明展」ではトラキア王の黄金のマスクを始めとするブルガリア国立博物館所蔵の秘宝の数々を鑑賞。北海道立三岸好太郎美術館の「鳥海青児と三岸好太郎」展では、春陽会をキーワードに二人の接点を探りました。

子ども芸術鑑賞ツアー

七月二十日　北海道立帯広美術館

「五味太郎作品展　絵本の時間」などを鑑賞。参加者は小学生六名と親一名。展示室ではクイズに挑戦し、塗り絵など皆楽しそうに取り組みました。五味太郎の作品はストーリーの流れに沿って展示され、お話を読んだり、原画に見入ったりして楽しみました。

鹿追中学校の鑑賞授業（12/5）

町内小中学校の神田日勝についての授業の取り組みから

故郷・鹿追と神田日勝についての理解を深めるため、「神田日勝学」に町内の小中学校が取り組んでいます。
今年は、瓜幕中学校が七月十一日に「人と馬、ウマ、うま」というテーマで総合学習、笹川小学校が九月十九日に馬の感想文を書くため来館、また油彩で静物画に挑戦、鹿追中学校が十月二十八日に職場体験、十二月五日に特別企画展「神田日勝の細密表現を巡って」の鑑賞授業、二月二十六日に鹿追小学校の総合学習として、常設展「神田日勝が描いた十勝の自然」を鑑賞、三月十二日に瓜幕小学校が総合学習として同じ常設展を鑑賞するなど、延べ一七七名の児童生徒が美術館に来館し、熱心に作品を鑑賞、授業に取り組みました。